

「家がいいね」 第101号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2012.10.9

住民のための病院が欲しい

気になるのは伊勢病院の再建です。「新病院建設基本計画策定委員会」という段階ですが、市民にとっては殆ど非公開の場で論議されています。

少ない情報から推察すると、病院のベッド数や建築場所があれこれと論議されていても、病院の運営の方向は従来の延長線で見えませんが、

伊勢地区では赤十字病院が飛び抜けて巨大化し、週6日救急当番をこなすため、急性期病院として短期滞在の医療を、利用する患者も求められます。

（2年前の「今後の伊勢病院を考える検討会」報告書）一方の伊勢病院は、内科医や研修医の力が欠け病床数も削減し機能低下して、閉院の可能性も検討されていました。存続・廃止の両論併記の結論でしたが、日赤の小型化をスヘアで用意するのではなく、まちの存続と地域医療を密接に考えて、新病院の役割を探る一致点がありました。

しかし、今の策定委員会の案では、建物の新築効果に期待をかけても、病院内実はギリ貧が続くという、公的病院赤字の過去の轍を踏みそうです。大事なものは、住民の生活や在宅医療・介護施設など、どのような協力関係を築き上げられるか、病院や行政関係者が聴き取りに回る活動です。地域と生きる公的病院ならば、実際にいづれも住民との継続的な懇談会を活動の柱としています。

竹内藤吉先生が生きておられれば

まもなく95歳を迎えられます。日野原重明先生が百歳ですが、彼と同じように周囲を力づけておられるでしょう。

1958（昭和33）年に



潰れそうになっていた伊勢病

院へ副院長として転勤され再建に奔走されました。職員や医師から慕われ、研修医の殺到する病院に

育てあげられました。1974（昭和49）年に

引き抜かれて院長として転任した厚生連松阪中央病院も、同様の鋭気あふれる病院にされました。

同僚の語る人柄は「明るくさっぱりしており、

簡明率直を愛し話も面倒な前置きはなく、いきなり本論に入るのが常であった。しかし情に厚く、人を愛し人に愛されたが、特に弱い立場の人に対して共感を示し、謙虚さを失うことはなかった」

退職後の1992（平成4）年には特別養護老人ホーム「神路園」の嘱託医を引き受けられ、高齢者の身になっての尽力がありました。伊勢病院に何度も喝を入れられましたが、そのスピリットの再現を願うものです。（生きておられれば・・・）

人生の最期を病院では、もつたいない

在宅ホスピス

は、地域の文化を変えます。看取りが開く未来への展望を、この著作で考えてください。春秋社の近刊です。

病院で死ぬのはもつたいない

（いのちを受けとめる新しい町へ）

山崎章郎
ニノ坂保喜

米沢慧



最高の一日、最良の最期

10月27日（土）午後1時

柏木哲夫先生と内藤いづみ先生の対談が日赤ホールで開催されます。終わりのある人生の最後を、どのように過ごすか大切なヒントを聴きましょう。150名限定での申し込み制とのことです。問い合わせは日赤患者支援センター（65・5002総務）



進富座は今年いっぱい

残念ですが区切りをつけられます。映画館かつ地域の文化センターとしての役割でしたが、我々が後の代に継げないものとなってしまいました。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御薊町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>